

平成17年度の基礎体験領域の取り組みについて

A Report of Approaches on "Basic Experience Area" in 2005

森 本 直 人
Naoto MORIMOTO

山 中 慎 嗣
Shinji YAMANAKA

秦 光 司
Koji HATA

齋 藤 英 明
Hideaki SAITO

嘉 賀 收 司
Shuji KAGA

島根大学教育学部附属教育支援センター紀要第5号

平成18年6月

「教育臨床総合研究5 2006研究」

平成17年度の基礎体験領域の取り組みについて

A Report of Approaches on "Basic Experience Area" in 2005

森 本 直 人*

Naoto MORIMOTO

秦 光 司*

Koji HATA

嘉 賀 收 司*

Shuji KAGA

山 中 慎 嗣*

Shinji YAMANAKA

齋 藤 英 明*

Hideaki SAITO

I はじめに

鳥根大学教育学部は、平成16年4月、全国の国立大学法人教育系大学・教育学部のなかで唯一「教員養成に特化した学部」として再発足した。教員養成の専門学部として、その教育理念を「子どもと教育活動に対する鋭い感性と情熱に溢れ、優れた教育的実践力を有する教員を育成すること」においた。そして学校教員に求められる「教育的実践力」を、大学における理論的学修によるものだけでなく、自ら主体的に関わる社会的・教育的体験や、子どもや社会人との直接的なふれあい・つながりの中での多様な実践的経験との往還によって修得されるものと捉え、このような観点から「1,000時間体験学修」プログラムを設け、全ての学生に卒業要件として1,000時間の社会的・教育的体験活動を義務づけたのである。

「1,000時間体験学修」の理念や構想については、昨年度の『鳥根大学教育臨床総合研究2005 Vol.04』において詳細に報告しているが、平成16年度から実際に学生を迎えての取り組みであり、附属教育支援センターを中心として、様々な問題と対峙しながら、着実に教育体験学修をプロデュースしてきている。

本稿は、「1,000時間体験学修」プログラム開始から2年目を迎えた平成17年度において、対象学生が、2年次生196名、1年次生171名の合計367名とおおよそ倍増した中で、2年次学生たちの「体験による学び」の発展を生み出すため、また1年次学生にはより意欲的に「1,000時間体験学修」に取り組んでもらうために附属教育支援センター基礎体験領域専門部会の取り組みをまとめ、報告するものである。

特に平成17年度は、「体験の省察」を意識的に取り組むために附属教育支援センター主催事業として「ウィークエンドスクール in 鳥大」と「基礎体験交流会」に重点をおくとともに、1年次学生への「1,000時間体験学修」導入教育としての「入門期セミナーⅠ」の実施態勢改善を試みたので、本稿はその報告を中心としてまとめていきたいと考えている。

*鳥根大学教育学部附属教育支援センター基礎体験領域担当

Ⅱ 1年間の取り組みの概要

卒業要件に「1,000時間体験学修」を位置づける試みは、全国的にも例を見ない。入学した全ての学生が1,000時間の体験を積み上げるということである。とはいえ、前例のない取り組みは大学教員と学生の双方に不安を感じさせている。「本当にできるのか、学生は育つのか」まさに教員養成の新たな道を切り開く途についたばかりである。

本学部の「1,000時間体験学修」は、基礎体験領域、学校教育体験領域、臨床・カウンセリング体験領域の3つ領域から構成されており、その内訳は表1のとおりである。

表1：「1,000時間体験学修」の内訳

| | 必修 | 選択 | 計 |
|----------------|-----|-----|-------|
| 学校教育体験領域 | 380 | | 380 |
| 臨床・カウンセリング体験領域 | 150 | | 150 |
| 基礎体験領域 | 60 | 410 | 470 |
| | 590 | 410 | 1,000 |

※数字は、時間数

ここでは、基礎体験領域のこの1年間の取り組みについて概要を述べることとする。

1. 基礎体験領域の基本的な考え方

今日の少子高齢化、国際化、高度情報化等の大きな変化は価値の多様化をもたらし、学校教育や教師、児童・生徒に新たな問題を投げかけている。子どもに関わる事件や事故、いじめ、不登校、学力の低下といった問題の根源は、学校教育制度によるものなのか、教員の資質が問われるべきものなのか、家庭教育の状況の変化によるものなのか、一概には言えないが、現状を打開するための手だてを準備する必要がある。多くの都道府県教育委員会で実施されている民間企業等への教員の研修派遣などは、学校という狭い世界でしか経験を積まない教員では乗り切れない状況が学校の中にあり、高度な対人関係能力や集団において発揮される指導性などの能力が今求められている証であろう。

基礎体験領域での体験は、子どもを教え、育てる専門職としての教員をめざす準備段階において、学校のみならず多様な場面で子どもと触れ合い、地域課題解決をめざす地域活動、ボランティア活動に参加して地域の構成員としての役割について考え、それらの体験を通して人間関係能力を高めていくことを目指している。文字通り教員へ向けての基礎となる体験と位置づけている。

- | | |
|------|------------|
| ねらい1 | 子ども理解を深める |
| ねらい2 | 指導力を高める |
| ねらい3 | 人間関係能力を高める |
| ねらい4 | 企画力を高める |

2. 体験の内容

ねらいにせまる体験を3つの視点で分類した。

(1) 直接こどもと関わる体験

文字通り学校内外を問わず子どもと直接触れ合う体験を指す。教員になるための準備段階に、様々な場において子どもと触れ合う体験は非常に重要である。ここで強調したいのは、従来の教育実習による学校内の関わりに止まらず、地域での子どもの姿に触れることで子どもの多面的な理解ができることにある。地域に開かれた学校づくりが叫ばれる中で、地域での子どもの姿を知っていることは、これからの教員にとって不可欠な要素となる。

(2) 子どもの育成に有効な知識や技術を獲得する体験

学生自らが自然体験や社会体験などを豊かにし、学んだ知識や技術を子どもとの関わりに生かすことをめざす体験である。この中には、指導者養成講座やボランティア養成講座等も含まれ、体験的学びの成果を次の活動に生かしていくサイクルを組まれたものもある。

特筆すべきは、今年度から国立の青少年社会教育施設と共同で教員養成における体験活動のあり方について実践的に研究（島根大学教育学部・国立三瓶青年の家共同調査研究事業）に取り組んでいることである。

(3) 地域課題の解決をめざす地域活動、ボランティア活動への参加体験

教員は、地域の構成員として果たすべき役割をもっている。ここでいう体験は、地域づくりや活性化に向けた取り組みや地域福祉など地域の課題に向けた取り組みにも関わる体験を指す。

公民館や福祉施設、NPO等との連携のもとに行う体験である。

3. 基礎体験の特徴

(1) 学外を舞台としている

基礎体験領域における体験は、大部分が学外で積み上げる体験である。授業とは別の時間に体験受け入れ先からの情報の中から学生の意志でエントリーして、学外に出かけて行う体験である。指導者は、大学の教員ではなく、自治体、教育関係団体、社会教育施設、NPO等の職員や指導員などである。そこでは、特定の技能が求められるというよりは、臨機応変でフレキシブルな対応が求められ、それらは学部カリキュラムでは獲得し難い多様な体験を豊かにする。

平成16年度からスタートさせたこの取り組みの対象学生は、1年生171名、2年生196名の計367名である。そして、学外の体験受け入れ先は、表2のとおりで約130団体から申し出があった。

平成17年度においては、学生の受け入れ先からのニーズと学生の参加希望の関係は、ニーズが学生の参加数を上回っている状況であった。

表2：学外での体験活動受け入れ先

| 教育行政機関等 | 学校等 | 少年各種クラブ（社会教育） |
|------------------|-------------------|--------------------|
| 島根県教育委員会 | 島根大学教育学部附属小学校 | 大庭小吹奏楽団 |
| 松江教育事務所 | 附属中学校 | ジュニアサッカー |
| 出雲市教育委員会 | 島根県立松江工業高校 | ブルーサンダーズ |
| 雲南市教育委員会 | 松江南高校宍道分校 | 乃木小プラスバンドクラブ |
| 大田市教育委員会 | 出雲養護学校大田分室 | 上郡柔道少年団 |
| 山村留学センター | 大田市立仁摩中学校 | 中央にこちゃんず |
| 松江市教育委員会 | 松江市立第三中学校 | 川津フットボールクラブ |
| 青少年支援センター | 雲南市立大東中学校 | |
| 安来市子育て支援課 | 松江市立生馬小学校 | NPO等民間団体 |
| 隠岐の島町教育委員会 | 大庭小学校 | NPO法人ねお（軽度発達障害親の会） |
| 奥出雲町教育委員会 | 宍道小学校 | NPOしまねおやこ劇場 |
| 東出雲町教育委員会 | 長江小学校 | 劇団あしぶえ |
| 斐川町教育委員会 | 母衣小学校 | プレプレまつえキッズ |
| 海士町教育委員会 | 八雲小学校 | 松江市ことばを育てる親の会 |
| 鳥取県教育委員会 | 古江小学校 | 松江市手をつなぐ育成会 |
| 西部ボランティアセンター | 八束小学校 | 出雲の子リーダ養成研修会 |
| 教育支援センター | 生馬幼稚園 | いちごの会（障害児支援団体） |
| 生涯学習センター | 城北幼稚園 | ぐるぐるアート世話人会 |
| 日吉津村福祉保険課 | 母衣幼稚園 | 鳥根県ことばを育てる親の会 |
| 南部町教育委員会 | 斐川町立中部小学校通級指導教室 | |
| | 鳥取大学附属中学校 | 鳥根県子ども連合会 |
| | 鳥取県立米子養護学校 | 日本自閉症協会鳥根県支部 |
| 社会教育施設等 | | のんびり学習会 |
| 国立三瓶青年の家 | 学童保育 | NHKプロモーション |
| 鳥根県立三瓶自然館 | 松江清心養護学校学童クラブ | （財）安部栄四郎記念館 |
| 青少年の家 | 松江養護学校学童クラブ | 池田事務所 |
| 出雲科学館 | 松江市中央児童クラブ | （財）境港市文化福祉財団 |
| 鳥取県立船上山少年自然の家 | 城西児童クラブ | 鳥根大学生協 |
| 大山青年の家 | 川津児童クラブ | |
| | 生馬児童クラブ | 大学 |
| 公民館等 | 朝酌児童クラブ | 鳥根大学教育学部特別支援教育講座 |
| 松江市朝酌公民館 | 鳥根県東部放課後児童クラブ研究集会 | 附属教育支援センター |
| 生馬公民館 | 益田市益田児童館 | 大谷研究室 |
| 古志原公民館 | 出雲市古志児童クラブ | 作野研究室 |
| 出雲市四絡コミュニティセンター | 広島市矢野南児童館 | 川路研究室 |
| 雲南市立松笠公民館 | 豊岡市放課後児童クラブ | 鳥根大学（公開講座） |
| 南部町立さいはく公民館 | | 鳥根大学生涯学習教育研究センター |
| 社会福祉施設 | 子どもの居場所づくり事業 | めだかの学校 |
| 鳥根県立身体障害者授産センター | 飯南町生涯学習センター | |
| 東部鳥根心身障害医療福祉センター | 松江市城北子ども広場 | |
| 四つ葉園 | 古志原子ども広場 | |
| さくらの家 | 雲南市立中野小学校 | |
| 虹の子保育園 | 木次小学校 | |

(2) 体験の積み上げを時間として認定している

授業の空いた時間や週末、長期休業中を活用して取り組んだ活動は、全て単位としてではなく、時間としてセンターが個別に認定している。

時間の算出方法は次のとおりである。

| | | | | |
|------|---|--------------|---|-------------|
| 認定時間 | = | 受け入れ先での体験時間 | + | 事前指導や打合せ時間 |
| | | + 事後指導や反省の時間 | + | 体験先往復に要した時間 |

1回2時間程度の活動もあれば、長期宿泊型の体験活動に参加したときのように、1回数十時間に及ぶものまでである。

各活動に参加した学生は、個別に「基礎体験活動記録票」に活動名、期日、場所、主な活動内容、振り返りの感想等を記載し、受け入れ先の指導者のサインを付したものをセンターに提出することとしている。センターにおいては、個別の記録票の活動を時間認定するとともに、記録票のコピーをファイリングし管理している。学期末等には、個々の学生に活動内容と累積の活動時間について通知している。

(3) 学生が選択して体験に参加する

学校教育体験領域と臨床・カウンセリング体験領域の活動が、学年の学生全員を対象に必修の授業形式で行われるのに対して、基礎体験領域の活動として選択して積み上げる体験は、多くが自己選択である。関わったことのない人と経験のないことをすることは、誰でも勇気がある。はじめは、掲示板で紹介された体験受け入れ先の中から自ら選択してエントリーするまでに時間がかかり、出遅れる学生もいた。表1に示した選択して積み上げる約410時間を4年間で積み上げるとすれば、年間約100時間程度となる。平成17年度末段階で2年生の平均積み上げ時間は、約260時間、1年生は約140時間であり、全体的には順調に体験を積み重ねてきていると言える。しかし、個人差があるため特に時間数の不足している学生については、個別に指導を行った。

なお、学生のエントリーの方法は、17年度からセンターHPからもできるようシステム化した。

(4) 現場経験のある教員が指導にあたっている

基礎体験領域の体験活動の全体運営及び学内での学生指導は、地元の鳥取県、島根県から招いた学校教育、社会教育の経験者（いずれも公立学校教員）が担当している。平成17年度から2名加わり、合計4名体制となった。毎週基礎体験部会を開催し、運営のあり方の検討や学内での学生指導、主催事業の企画立案等について協議しながら進めた。

また、学生の活動場所へ行って、受け入れ先の担当者から学生についての感想や課題等について情報収集したり、学生指導を分担して実施した。

(5) ねらいの共有化と振り返りは学内で行っている

ほとんどの体験は、学外で行うことは先に述べたとおりであるが、学内において行っている活動がある。主なものを以下にあげることにする。なお、具体的な内容は、後述する。

1) 入門期セミナー I (20時間)

(平成17年4月23日～4月24日に島根県立少年自然の家で実施)

セミナーでは、入学した学生に「1,000時間体験学修」を中心としたガイダンスを実施し、今後の学生生活について展望することは重要である。そこで、全1年生を対象に入学後のなるべく早い時期に宿泊研修を行い、基礎体験学修のねらい、内容、手続きの方法、学生相互の交流活動、礼儀やマナーの指導等を行っている。

2) 基礎体験交流会 (5時間)

(平成18年2月20日(月)に学内で実施)

年度の終わりにあたり、1年間の体験の積み上げについて振り返り、自らの成長を確認したり、今後の課題を確認する機会とする。また、他の学生の体験を聞き合い、自己啓発の機会とするため実施している。

3) ウィークエンドスクール in 島大 (選択活動)

学外での体験の内容は、子ども祭りのようなイベント型のものから学童保育のような年間通じたものまで多種多様である。基礎体験によって獲得する能力を考えたとき、受け入れ先と対等の関係の中で「計画 (Plan) - 実施 (Do) - 評価 (See)」の一連のサイクルの中から学ぶ関係ができればさらに質の高い体験となることが今後必要となるが、現段階はその途上にある。そこで、センター教員の指導の下で学生による企画事業の実施を検討し平成17年度から取り組んでいるが、週末の子どもの居場所づくり事業である。

なお、本事業は他の学外体験と同様に学生が選択して参加する活動である。

Ⅲ 主要な活動の報告

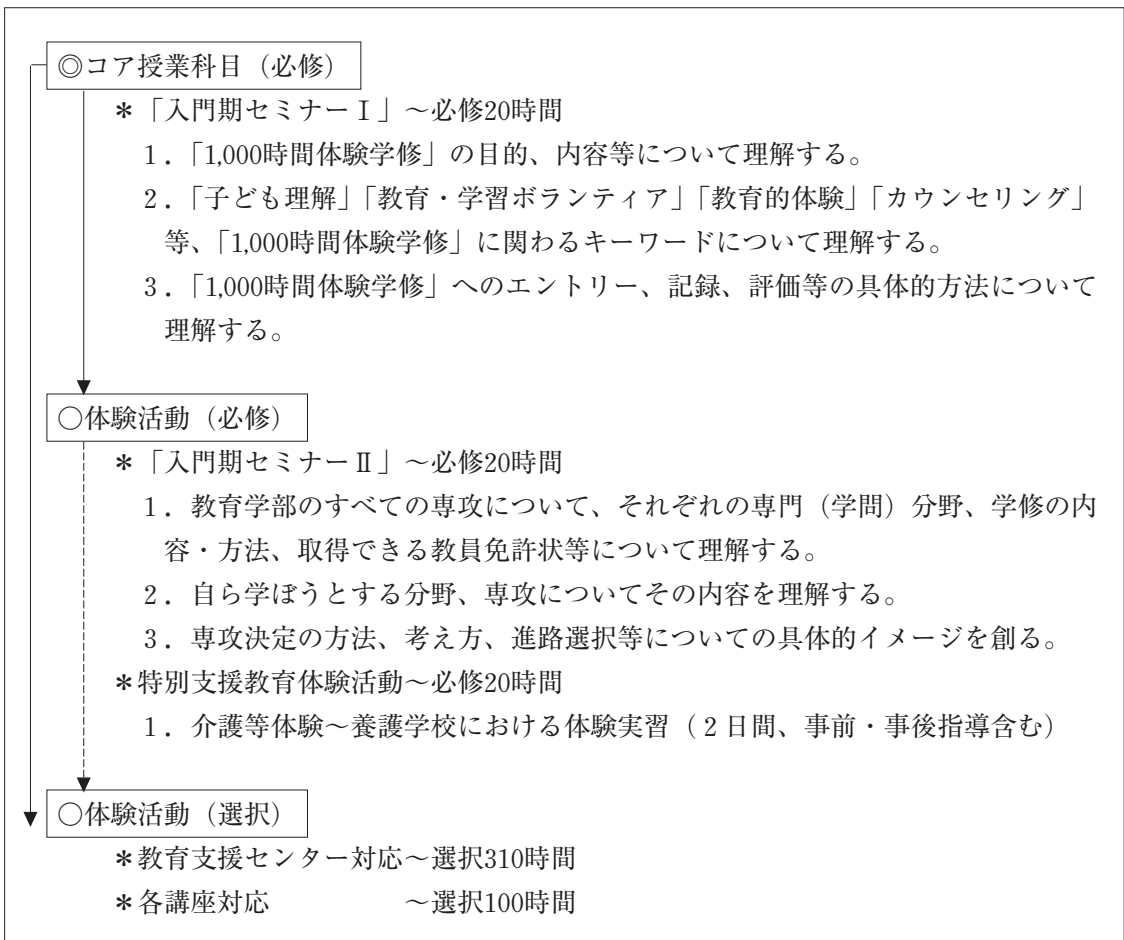
1. センター主催事業

(1) 入門期セミナー I

1) 基礎体験領域における授業科目

基礎体験領域にはコア授業科目（必修）として、入門期セミナー I の他に、必修体験活動として、入門期セミナー II と特別支援教育体験活動、選択体験活動として、教育支援センター対応のものと各講座対応のものがある。それらの学習課題及びその関連は次のようになる。（表 1）

表 1：基礎体験領域における授業科目



入門期セミナー I は、これから始まる基礎体験学修のまきに出発点にあたるものであり、学生にとっては4年間の見通しを持つうえで大変重要な意味を持つものである。平成17年度はこのことを踏まえ、大学に入学して間もない4月末の週末を利用して、新1年生全員による一泊二日の研修を実施することとなった。

2) 入門期セミナー I 2005

平成17年度の入門期セミナー I は、江津少年自然の家を会場として、新1年生171人の内、

休学者2名、急病による欠席者1名を除く、168名の参加で開催された。当日は「学校教育実践研究Ⅰ」のクラスを活動母体とし、2日間で実施されるすべてのプログラムを共同・協同というかたちで行い、学生相互の交流も図れるように配慮した。この入門期セミナーⅠの実実施計画は次の通りである。(表2)

表2：入門期セミナーⅠ2005 実施計画書

入門期セミナーⅠ実施計画

1. ねらい

- 4年間の学生生活を見通しながら、教職への関心と意欲を高める。
- 教育体験1,000時間の概要について理解し、各領域の体験への積極的な参加を促す。
- 様々な教育現場に出るにあたり、社会人としてのマナーを身につける。
- 青少年社会教育施設の意義と役割についての理解を深める。

2. 期 日 平成17年4月23日(土)～4月24日(日)

3. 会 場 島根県立少年自然の家(島根県江津市松川町)

4. 日 程

| | | | | | | | | | | | | |
|--------------|--------|--------|-------------|--------------|-------------|-------------|--------|-------------|-------|-------------------|-------------|-------|
| | 8:15 | 8:30 | 10:30 | | 12:00 | 13:30 | | 15:30 | | 17:00 | 19:30 | 21:30 |
| 4 / 23 | 集 合 | 移 動 | 入 所 式 | OR 整 理 | 昼 食 | 研 修 1 | | 研 修 2 | | 夕 休 憩 食・ | 研 修 3 | |
| | 7:40 | 8:40 | | 9:30 | | 11:00 | | 12:00 | 13:30 | | 14:30 | 17:00 |
| 4 / 24 | 起 床 | 清 掃 | 朝 食 | 整 理 | 研 修 4 | 研 修 5 | 昼 食 | 研 修 6 | | 移 動 | 解 散 | |

5. 研修内容

1. 研修1 「各学年のカリキュラムと1,000時間体験学修について」
2. 研修2 「マナーとコミュニケーションについて」
3. 研修3 「レクリエーション指導法について」
4. 研修4 「各班による選択活動」
5. 研修5 「学校について」「教員という仕事について」
6. 研修6 「基礎体験の具体的な内容と手続きについて」

6. 持ち物

運動着、ねまき、下着、体育館シューズ、洗面用具(タオルを含む)、筆記用具、ビニール袋(ゴミは持ち帰り用)、シャンプー等(風呂には石けんのみあります)

7. 経 費

皆さんの負担は3,000円です。

内訳：食事代2,150円(昼食550×2食+朝食450円+夕食600円) 宿泊代1,030円、その他交通費等。(一部、大学が負担)

8. 参 加 教育学部1年生(171名)、附属教育支援センター教職員7名

3) 各研修の内容と学生の反応

研修1では、今後取り組んでいく「1,000時間体験学修」についての講義であった。その中身やシステムを理解していくうちに、大学入学時に各方面で耳にした1,000時間という絶対量に対する圧迫感から解放されていく学生の姿が印象に残る。この講義は教育支援センター長とスタッフによって実施された。

- ・いろいろな体験活動に参加していくことは将来とても役に立つと思った。(男)
- ・今後の大学での取り組み方とか心構えみたいなものを考えさせられた。(女)
- ・色々なことを体験しておかなければならないと改めて感じました。(女)
- ・1,000時間は無理だと思ったけど、とりあえず何か始めようと思った。何か始めることで意欲が増して、さらにいろんな体験につながればいいと思う。(男)
- ・1,000時間体験とは何か、何のためにあるのかなどがよく分かった。(男)

研修2では「学生の常識とマナー」というテーマで、あいさつや礼の仕方など、講義とともに演習も行い、改めて基礎基本の大切さを痛感した学生も少なくなかった。この講義は企業マナーインストラクターの資格を持つセンタースタッフによって実施された。この講義後、学生は誰彼となく気持の良い挨拶を交わすようになり、微笑ましい光景が多く目に付いた。またこの姿は後に学内にも持ち込まれ、教育学部棟では挨拶する学生が増えたという声が各方面から寄せられた。

写真1：挨拶の練習風景



- ・これからの自分かなり役立つなと思いました。(男)
- ・言葉遣いやお辞儀など社会に出たときの確にこなせるように早く身につけたい。(女)
- ・自分がいかに日常生活においてできていないかが分かり反省させられた。(女)
- ・これからの人生に必要なこと特にあいさつの重要性を改めて感じた。最近おろそかになっていた感じがするので、日々の生活からあいさつするよう心がけたいと思う。(男)
- ・礼儀の実習もとても為になりました。大学に戻ってからも挨拶をするよう心がけているけど、相手からもかえってくるととても気持ちいいです。(女)

研修3は「レクリエーション指導法について」というテーマで、外部講師による指導を受けた。

(邑南町教育委員会地域教育コーディネーター 木村真介先生)

ちょっとしたゲームを通して仲間づくりや集団づくりにつなげていく手法が学生にとってはとても新鮮であり、日中の研修とは打って違って若者らしい嬉々とした姿が随所に見られた。

写真2：ゲームに熱中する学生たち



- ・子どもたちをひきつけるためにはどうすればいいかを学んだ。楽しく集中して活動すればまとまりがなくなったり、うるさかったりして上手くできないと思うが、注目ポイントを一点に絞って話す話し方は、集中させることができるのだと分かった。(女)
- ・どうやって子どもたちを引き込むかは難しいことだと思いました。(女)
- ・講師の方の、あのみんなを熱中させてしまう技術を少しでも習得したいと思う。(男)
- ・僕は初めて会った人と喜んだり悔しがったりしているのを、先生に指摘されて始めて僕が自然に皆と溶け込んでいることに気付き、照れと嬉しさを覚えました。(男)

研修4は、①火おこし②浅利富士登山③フィールドアスレチックの中からひとつを班で選択するという体験活動であった。好天にも恵まれ、二日目の午前中は、寝食を共にし、気心が知れあった仲間とともに快適な汗をかいていた。

写真3：頂上でのひととき



写真4：アスレチックに出る前の一瞬



- ・登山を経験した。これぐらいでバテてはだめなので、もっと体を鍛えて子どもたちといっぱい遊びたいと思う。(女)
- ・二日目の登山では、久しぶりに自然を見た気がしてとてもリフレッシュできた。(男)
- ・アスレチックでは、子供の時のようなワクワクした気持で、夢中になって自然の中で戯れていました。これから子供達に自然と触れ合うことが大切であるということは伝えて行きたいと思いました。(女)
- ・火起こしをしました。火が少しついたとき、友達が松の葉をのせて息をふきかけて火を大きくしていました。私にはそんな知識が全くないので驚きました。これから基礎体験領域から、自然に関係した体験などたくさん選択したいです。(女)

研修5では、「教員という仕事について」「学校について」というテーマで、2人のセンタースタッフによって行われた。この2人は今年度、島根鳥取両県から派遣された現職教員であり、2人から発せられる現場の生の声が学生たちには刺激的だったようである。

- ・学校教職の話聞いて、まだまだ教職への道は長いと思った。(女)
- ・教師には大変な事もたくさんあるけど、それ以上に子どもたちの人生にかかわりあえたり、人との出会いがあったりとすばらしい事があるので、改めて教師という職業の魅力を感じることができました。(女)

研修6は二日間の研修のまとめとして、基礎体験学修の具体的な内容と手続きについて、下記の記録票をもとに振り返りを行った。

表3：基礎体験学修記録票

000768

基礎体験学修（講座別）記録票

(様式1)

| 学生番号 | | 工類) 氏名 | | |
|--|--|------------|-----------|-------|
| 活動名 | 入門期セミナーⅠ | | 分類 | - - - |
| 活動時間 | 1事前打ち合わせやOR等 期日 平成 年 月 日 () 時間 : ~ : 会場 | | 時間 | |
| | 2活動 期日 平成17年 4月23日(土) ~ 24日(日) 時間 8:15 ~ 17:00 | | 20 時間 | |
| | 合 計 | | (20) 時間 | |
| 活動場所 および 所在地 | 会場名 島根県立少年自然の家 所在地 島根県江津市松川町 | | | |
| 活動日程および活動内容（プログラムや活動概要について記入して下さい。） | | | | |
| <p>4月23日 ・研修1 基礎体験について 島根大学1000時間体験への挑戦など ・研修2 礼儀,マナーについて 支援センターのこと。おじぎの実習 ・研修3 レクリエーション 「すけさん」の指導のもと、ジャンケンを使いレクリエーションなど</p> <p>4月24日 ・研修4 選択活動 山登り,火おこし,アスレチックに分かれ活動 ・研修5 学校教職 中学生,小学生の話 など ・研修6 振り返り 記録表の記入についてなど</p> | | | | |
| 感想・今後の課題等（活動に参加して感じたことを記入して下さい。） | | | | |
| <p>まだ完全には慣れない大学生活や一人暮らしで、一泊の研修は、少し辛いと思っていた。でも行ってみて、たくさんものを得られたような気がする。まず、基礎体験についての話を聞いていて、島根大学は、全国に先駆けて、本当に大変な、しかし本当に必要な取り組みを行っていることが分かり、そのレベルの上に自分も立っていることがすごくうれしく思っている。そして、夜のレクリエーションが、この研修の中で全盛盛り上がり、楽しめた。今まで話したことのない人とも、みんな一緒に楽しくジャンケンで戦い白熱し、本当におもしろかったし、これをまた将来、どこかまでやりたいと思っ。友達との幅も広がり、これからの大学生活の活力を得られた研修だった。 <small>がんばって下さん!</small></p> | | | | |
| 活動を通して学習したこと（当てはまるものすべてに○をつけて下さい。） | | | | |
| <p>1 専攻の指導技術や知識が向上した ② コミュニケーション能力が高まった 3 子ども理解が深まった 4 自然理解が深まった ⑤ 活動の幅が広がった ⑥ 新しい考え方に触れることができた ⑦ 専門的な知識や技術の必要性を感じた ⑧ 事業の面白さを体験できた 9 その他 ()</p> | | | | |
| 事業実施者のコメント | | | | |
| <p>平成17年 4月 30日 講座担当者名 附属教育支援センター</p> | | | | |

*参加した学生は、活動ごとに記入して提出して下さい。

20 時間認定

4) 活動の評価と課題

ここでは、前述の研修6で学生たちが記入した基礎体験学修記録票（様式1）（表3）をもとに、活動の評価と課題についてまとめたい。

まずこの記録票は、学生たちが大学の内外で体験してきたことをまとめ、それによって自分の傾向を把握すること、そして、蓄積されたものを見直ししながら、次へのステップにつなげるための一手段として活用している。

ここに寄せられた感想を見ると、「この時期になぜ、何のためにこの研修があるの。」「見知らぬ人たちの中での生活になるので、気が進まない。」等、このセミナーをマイナスイメージで受け止めている者が少なくなかった。しかし、二日間ではあるけれども、中身の濃い時間を共に過ごしたせいか、終わってみると「この研修に参加できてよかった。」「これから何をすべきか分かった。」「友達の輪が広がり、大学での居場所ができた。」等々、その思いは一変している。アンケート結果（表4）が示すように、学生相互のコミュニケーションが深まり、教職という志を一にする仲間がそこに居るという実感が持てたことが大きく作用しているように思う。

一方、入学直後の緊張感を持ったまま生活してきた学生にとっては、このセミナーのスケジュールをこなすのに相当な疲労感を伴い、ストレスが残る面もあったようである。適度な休憩を挟むなど、日程の見直しも今後の課題となろう。

最後に、この研修を終えるにあたって、所員の方にお礼を言う場面で、進んで研修の成果を発表しようとした学生の姿に、今後の意気込みを感じることができ、このセミナーの当初のねらいが達成できたのではないかと実感した。

写真5：学生代表による退所時の挨拶



表4：「この活動でどんなことができましたか」

| No | 項目 | Ⅰ類 | | | Ⅱ類 | | | 全体 | | |
|-----------|----------------------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| | | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 |
| | | 51 | 79 | 130 | 17 | 22 | 39 | 68 | 101 | 169 |
| 実数 (人) | 1 専攻の指導技術や知識が向上した。 | 26 | 37 | 63 | 11 | 5 | 16 | 37 | 42 | 79 |
| | 2 コミュニケーション能力が高まった。 | 36 | 58 | 94 | 16 | 16 | 32 | 52 | 74 | 126 |
| | 3 子ども理解が深まった。 | 19 | 12 | 31 | 8 | 9 | 17 | 27 | 21 | 48 |
| | 4 自然理解が深まった。 | 11 | 14 | 25 | 4 | 3 | 7 | 15 | 17 | 32 |
| | 5 活動の幅が広がった。 | 22 | 32 | 54 | 15 | 5 | 20 | 37 | 37 | 74 |
| | 6 新しい考え方に触れることができた。 | 31 | 34 | 65 | 15 | 14 | 29 | 46 | 48 | 94 |
| | 7 専門的な知識や技術の必要性を感じた。 | 21 | 25 | 46 | 13 | 8 | 21 | 34 | 33 | 67 |
| | 8 事業の面白さを体験できた。 | 16 | 31 | 47 | 7 | 8 | 15 | 23 | 39 | 62 |
| | 9 その他 | 1 | 2 | 3 | 0 | 0 | 0 | 1 | 2 | 3 |
| 比率 (%) | 1 専攻の指導技術や知識が向上した。 | 0.51 | 0.47 | 0.48 | 0.65 | 0.23 | 0.41 | 0.54 | 0.42 | 0.47 |
| | 2 コミュニケーション能力が高まった。 | 0.71 | 0.73 | 0.72 | 0.94 | 0.73 | 0.82 | 0.76 | 0.73 | 0.75 |
| | 3 子ども理解が深まった。 | 0.37 | 0.15 | 0.24 | 0.47 | 0.41 | 0.44 | 0.4 | 0.21 | 0.28 |
| | 4 自然理解が深まった。 | 0.22 | 0.18 | 0.19 | 0.24 | 0.14 | 0.18 | 0.22 | 0.17 | 0.19 |
| | 5 活動の幅が広がった。 | 0.43 | 0.41 | 0.42 | 0.88 | 0.23 | 0.51 | 0.54 | 0.37 | 0.44 |
| | 6 新しい考え方に触れることができた。 | 0.61 | 0.43 | 0.50 | 0.88 | 0.64 | 0.74 | 0.68 | 0.48 | 0.56 |
| | 7 専門的な知識や技術の必要性を感じた。 | 0.41 | 0.32 | 0.35 | 0.76 | 0.36 | 0.54 | 0.5 | 0.33 | 0.40 |
| | 8 事業の面白さを体験できた。 | 0.31 | 0.39 | 0.36 | 0.41 | 0.36 | 0.38 | 0.34 | 0.39 | 0.37 |
| | 9 その他 | 0.02 | 0.03 | 0.02 | 0 | 0 | 0.00 | 0.01 | 0.02 | 0.02 |

(2) ウィークエンドスクール in 島大

昨年度から始まった基礎体験領域での活動において、「学校における支援活動や地域社会で展開されている子育て事業や支援事業への参画及び活動支援、様々な指導技術や支援法を学ぶ講座への参加など多様な体験を通して、人間関係力を培いながら子どもや子どもをとり巻く社会に対する理解を深め、教職をめざすものとしての自覚と意欲を高める」ことを目的に、学生は様々な活動に参加してきた。子どもとふれあったり地域の活動に参加したりすることで、子ども理解力や指導力を高めたり、人間関係力を高めたりするなど大きな成果があった。(詳細は、教育臨床総合研究4 2005研究 「平成16年度の基礎体験領域の取り組みについて」を参照)

一方いくつかの課題もあげられた。事業参加にあたって、活動場所への移動時間、交通費、大学の授業との重複などの条件により参加できにくいことがある。また、週末や放課後の活動が多いことから、Ⅱ類(音楽、健康・スポーツ)の学生を中心に、レッスンや部活動の練習と重なり基礎体験の活動に参加できにくい状況があった。次に、活動によっては子どもへの関わり方や疑問点に対して、その場でのアドバイスや指導を受けにくいことがあるために、学生へのフォローが十分できにくいこともあった。さらに、活動の主体という観点から見ると基礎体験領域にかかわる様々な活動を地域や学校に求めるだけでなく、大学の持つ施設や人材を積極的に提供し、子どもの居場所として大学が地域に貢献することも求められている。

こうした課題をもとに、大学が主催する活動を企画し、「ウィークエンドスクール in 島大」と名付け以下のような目的で実施することにした。

<ウィークエンドスクール in 島大の目的>

- (1) 松江市内を中心とした子ども達に安心で安全な週末の活動拠点を提供し、様々な活動機会や交流活動を実施する。また、本教育学部がもつ施設や人材(教員や学生)を積極的に提供し、子どもたちの居場所として、活動や学習の場として提供する。
- (2) 本事業を通じて、学生が子どもたちに組織的、継続的に関わる機会を確保するとともに、学生が自ら組織し企画・実践・評価(反省)の一連の教育活動を体験し、実践力を高める場とする。また、学部教員が指導・助言しながら事業の質を高める。
- (3) 各講座の専門性を地域教育活動の場で発揮する機会を確保し、各講座における教育課題に対応した教員養成に資する。

1) 取り組みの実際

① 「ウィークエンドスクール in 島大」の企画から子ども募集までの概要

この企画の開催にあたり、学内では教授会において各講座からの開催教室を募集した。これに対して6つ講座から7教室の開催の申し出があり、教育支援センター主催の教室を含め8教室の開催となった。これをうけて、開催期日や活動場所などの調整を図りパンフレットを作成し、参加者の募集となった。

この企画の開催にあたっては、松江市教育委員会、松江市小・中学校長会、松江市子どもの居場所作り実行委員会などの後援を得て、市内の小学校5年生から中学校3年生までを対象に参加者を募集した。教育支援センターの教員が各小・中学校に直接出かけ、パンフレットと共にこの企画の趣旨を説明しながら児童・生徒の参加についての協力をお願い

した。(開催教室，参加人数，開催期日などについては資料3参照)

② 学生主体の運営

「ウイークエンドスクール in 島大」が地域の活動と大きく違う点は，学生が主催者であるということである。地域の活動に参加する場合は，あくまでも主体は主催者側であり，参加する学生は活動を支援する側としての参加である。学生の主体的，自主的な判断による関わり方や運営などは，活動への参加回数や主催者側の判断によって大きく違うが，運営に対する責任は基本的には主催者側にある。一方，「ウイークエンドスクール in 島大」は，運営の責任は学生に任せられている面が多い。それだけに，学生の創意工夫を生かしたり主体的な活動を行うことができ，自分たちの手で企画運営していくという意識を持ちながら取り組むことができる。

地域の活動に対する学生の募集と同様に，この「ウイークエンドスクール in 島大」の企画段階から学生を募集した。これに対して運営スタッフとして10数名の学生の応募があった。その後，毎月の「ウイークエンドスクール in 島大」の学生スタッフの募集に対しては，たくさんの学生が参加した。

この学生スタッフの活動としては，教育支援センター教員の指導のもとに，大きく2つの柱を設定し取り組んだ。その一つが，各講座開催の教室を中心にしたこの「ウイークエンドスクール in 島大」全体の運営である。事前の打ち合わせでは，初めて参加した子ども達が，楽しんで参加できるような雰囲気をどのように作っていくのか，送迎の保護者への挨拶や言葉がけをどのようにするのかといったところまでも気を配った。開催前には，教育支援センターの部屋を活用し，何度も学生が話し合いを行ったり様々な教材を作成するなど学生の主体的な取り組みが見られた。車ででの来場の保護者のための駐車場での誘導・案内，当日参加した子どもの受付，開始時間までの子どもへの対応，会場までの掲示，各講座の開催教室までの案内・誘導，終了後の子どもの誘導から保護者への引き渡しなど，運営に関する様々なことに対して細かい計画を立て，役割分担を決め対応していった。

開催当日は，受付で積極的に子どもに声をかける学生や優しく話しかけながら会話をする学生の姿も見られた。最初は，何をどのように進めていけばよいのかわからなかった学生も教育支援センターの教員のアドバイスや協力を得ながら，目に見えないところでの準備や配慮をすることで，一つの企画を運営していくことの大変さと共に，どのようなことに配慮していけばよいのかと言うことを経験を通して学ぶことができた。

写真1：受付での子どもへの対応



③ 教育支援センター主催による開催教室

学生スタッフの活動の柱の2つめは，教育支援センター主催の開催教室の企画運営である。地域の活動と違い教育支援センターの教員の指導のもとに活動していくことで，学生に育てたい資質や能力を系統的に育てることができると考えた。子どもの立場に立ってど

のような活動がいいのか、また、その活動を実施するにあたりどのような手順で準備を進めていくのか等様々な面から、教育支援センター教員が学生をサポートしながら進めていった。今年度、教育支援センターが企画した開催教室は、担当教員で活動内容を事前に決め、その運営を学生が進めていくという形で実施した。

学生が主体的に教育支援センターを活用して事前の打ち合わせを何度も行い、細かな点にまで配慮しながら企画運営を行うことで、自分たちの手で作り上げていくことの楽しさを学んだり、自分たちの手で最後まで作り上げるという責任感を持ちながら取り組むことができたようだ。また、企画から運営までのさまざまな活動において直面する様々な問題解決場面では、学生同士の主体的なかかわりが求められるが、目的達成のために積極的な意見交換や調整を行う姿が見られた。

教育支援センターの担当者が配慮したことは、学生の計画したことだけでは解決できない問題や足りない面は、解決に向けてのヒントを与えたりアドバイスも行ったが、基本的には教員側はあくまでも一緒に活動するアドバイザー的な存在としてかかわった。学生たちが自分たちの力で取り組めるようなかかわりを心がけた。

④ 開催教室の記録と学内への広報活動

活動は学内の様々な場所で開催されているために、それぞれの教室の活動の様子がわからなかった。そこで、学生スタッフが各開催教室の活動の様子取材を行った。活動の様子、参加者の声、主催者（講座の学生）の感想・反省、記録者の感想などを写真と共に記録した。この取材により、開催教室の子どもの様子だけでなく、成果や問題点の把握と共に、今後の運営面での改善につなげていくことができた。

写真4, 5, 6 : 各講座開催の様子を紹介した壁新聞の一部

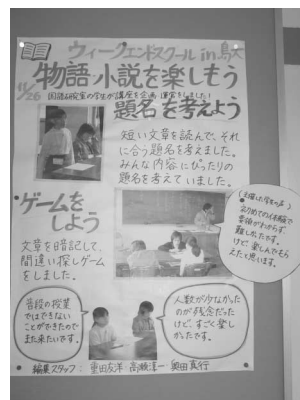


写真2 : 学生スタッフの事前打ち合わせ



写真3 : 取材をもとに壁新聞を作成



さらに、各講座開催の活動の様子を担当の学生スタッフが取材し、その記録をもとに、模造紙を利用して壁新聞を作成した。作製した壁新聞は、教育支援センター前の壁面に掲示をした。各講座でどのような活動が行われたのかを写真と共に記事にすることで、これまでに参加した子ども達の様子がよくわかり、参加する子ども達の意欲や満足感につながったと思われる。

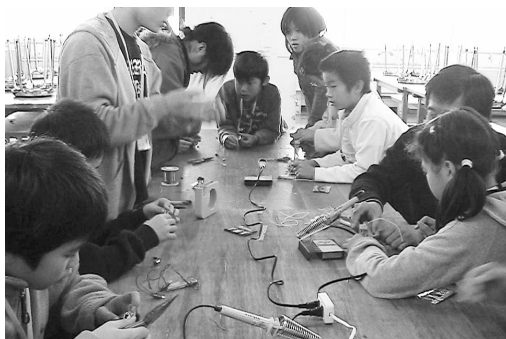
⑤ 講座主催の活動

「ウイークエンドスクール in 島大」の開催にあたっては、6つの講座から開催の要望があり7教室の開催となった。どの開催教室もそれぞれの講座の特色を生かして、様々な内容であった。一番の特色は、学生が専門を生かした活動内容を工夫をすることができ、意欲的に取り組むことができるという点があげられる。大学で学んでいる専門的な知識や技能を生かして、どの様な企画をすれば小・中学生に楽しんでもらえるのか、興味を持ってもらえるのかといったことを実践する場であるといえる。実際の活動の様子をいくつか紹介する。

ア 理科専攻の学生による「電気のおもしろ実験教室」

電気が発生する仕組みの説明から始まり、風船を使って静電気を発生させる実験を子どもたちは学生といっしょに積極的に取り組んでいた。最初は緊張気味であった子どもたちもいつの間にか夢中になって取り組む姿が見られた。アルミ箔と圧電器を使っての放電実験（稲妻パチパチ）は、苦勞しながらも一生懸命に作業する子どもたちの姿が印象的であった。子ども達が興味を持って取り組んでくれるように、教材の準備も大変丁寧に行われていた。時間配分が予定より随分と延びたようだが、学生達も子ども達の一生懸命に取り組む姿に満足そうであった。

写真7：電気のおもしろ実験教室の様子



イ 美術専攻の学生による「テラコッタ」

2回連続開催の教室であった。1回目は、粘土作りから作品作りに取り組み、2回目は焼いた作品の色つけとラッピングという活動であった。

1回目の午前中は、粘土作りから始まった。粘土の素となる固い土を細かく砕く、細かくなった土をざるを使って振るう、水を混ぜてこねるなど根気のいる作業であったが、子どもたちはとても真剣な表情で取り組んでいた。

午後は、粘土の板を作りいよいよ作品づくりに取りかかった。豚の貯金箱、花瓶、ペン立てなど、それぞれが思い思いの作品作りに取り組んだ。2回目は1回目に作製した作品が焼いてあり、その作品に色を付けていく作業に取り組んだ。美術の講座の教員が中心になっ

写真8：テラコッタ教室の活動の様子



て指示を出し、学生が子ども達の作品作りのサポートを行うという進め方であった。作品作りを通して学生と子どもとの自然な関わりができるようになっていく様子が印象的であった。

その他の開催教室の活動の様子

写真9：「島大フレンドパーク」
(健康・スポーツ専攻)



写真10：「英語で遊ぼう」
(言語教育(英語)専攻)



写真11：「物語・小説に親しもう」
(言語教育(国語)専攻)



写真12：「身体で音楽」
(音楽教育専攻)



写真13：「七宝焼き」
(美術専攻)



写真14：「テラコッタ」
(美術専攻)



写真15：「小物づくり」
(教育支援センター)



写真16：「自然観察」
(自然環境教育専攻)



2) 成果と課題

① 各講座開催教室について

このウイークエンドスクールが、地域の子ども達にとっては、休日の子どもの居場所の一つとして機能を果たしているといえよう。また、各講座の大学生が中心となり、教科にかかわる内容を楽しく学んだり体験したりすることができるといった点では、各講座の専門性を地域教育活動の場で発揮する機会としての役割を果たしたといえるのではなかろうか。

主催した学生は、1, 2 回生が中心であったために事前準備不足や子どもとかかわる場面での戸惑いなどたくさんの感想や反省を述べていたが、回を重ねるごとに内容も改善されたり、子どもとかかわり方も慣れてきたりして徐々によりよい活動になっていった。子どもたちにこの教室での体験を通して、自分たちが専攻している教科のおもしろさを味わってほしいという意識で取り組めたことで、満足感や充実感を味わうことにつながった。こうした活動の積み重ねが、各講座における教科の指導法や教材研究につながっていくものと考えている。

② 参加した子どもたちについて

参加した子ども達にとって、この「ウイークエンドスクール in 島大」はどのように受け止められていたかについては、ほとんどの子ども達が、「楽しかった」「また参加したい」「いろいろな友達と遊べて嬉しかった」「大学生のお兄さんお姉さんと一緒に活動できて嬉しかった」など、大変好意的な感想をアンケートに記入していた。また、活動中に学生スタッフが直接聞いた感想でも同様の回答を聞くことができた。今度このような機会があれば参加したいかという質問にもほとんどの子ども達が、参加を希望していた。さらに、様々な学校からの参加児童生徒との関わりについても好意的に受け止めていた子ども達がほとんどであった。

一方、教室によっては子どもの参加人数が少なく残念であったという声が聞かれた。数人での活動になってしまう教室もあり今後、参加人数の確保のための工夫が必要である。

③ 教育支援センター主催に参加した学生について

この「ウイークエンドスクール in 島大」事業を通して、学生は大変多くのことを学ぶことができた。

○学生自身の企画・運営力

自分たちで企画・運営することで見えてくるものがあるということである。一つのことを企画段階から取り組むことにより、目に見えないところでの配慮や調整が必要であり、そうしたことがとても大切であるという意識を持った学生もいた。

○協働性の高まり

事前準備の時間を大学内で確保できるために学生同士の関わりも必然的に多くなり、今後も継続的な取り組みにより企画運営にかかわった学生の協働性が高まっていくことが期待できる。

○P-D-C-Aサイクルによる評価と改善

今年度、教育支援センターによる開催教室は、開催までの時間的な制限などの理由から、教員が中心となり開催教室の内容を企画した。学生スタッフについては、教育支援センター教員の指導のもとに、運営面を中心に活動していくことになった。今年度の経験を生かして、来年度はスタッフリーダーとしての活躍の場を提供していくことが大切であると考えられる。運営面での経験を生かし、上学年の学生が下学年の学生を指導していくことでより学生主体の運営にしていくことが必要である。

子どもたちとのかかわり方や企画内容・運営方法などについて、取材メモやそれぞれの担当ごとに反省を行い、より充実した活動にするための改善点や改良点などを明らかにしていった。開催日ごとに反省を行うことで、次回の活動に生かすことができた。

学生が自ら活動を組織し、計画・実践・評価（反省）・改善の一連の教育活動を体験しながら、実践力を高める場とすることができるものとする。と考える。

資料1：学生スタッフの感想・今後の課題（活動記録票原文の一部）

得られた成果や感想・今後の課題等（活動に参加して感じたことを記入して下さい。）

活動を通して、子どもへの接し方が変わったと思う。最初は戸惑うことの方が多く、事務的な口言葉にばかりなっていたのでは「よしよし」。しかし、オリエンティングを企画し、準備を進めていきながら、「子どもってこういうことが楽しいんじゃないか、この説明じゃわかりにくいんじゃないか、初対面の子とどのくらい仲良く「いれるのか。」等、子どもの立場によって（視点によって）考えたり、改良を加えたりするうちに、感覚的なものとして習慣づけられた気がする。この活動を通して、子どもからパワーをもらっていることを感じる自信ができたと思う。

資料2：学生スタッフの感想・今後の課題（まとめ）

○活動を通して、子どもへの接し方が変わったと思う。最初は戸惑うことの方が多く、事務的な口調になってしまっていたのではないかな…。しかし、オリエンテーリングを企画し、準備を進めていきながら、「子どもってこういうことが楽しいんじゃないか、この説明じゃわかりにくいんじゃないか。初対面の子どもとどのくらい仲良くなれるのか」など、子どもの立場になって（視点に立って）考えたり、改良を加えたりするうちに、感覚的なものとして習慣づけられた気がする。（2年生・女子学生）

○最初はどんな風にやっていけばいいのかわからなかったけれども、メンバーのみんなと話し合い工夫していくうちに、スムーズに事業を運営できるようになりました。記録をとり、新聞を作るなど、観察したことを活かしていける工夫もできるようになりました。また、自分たちの企画では率先してどうしたら子どもたちを楽しんでもらえるか考え準備できたと思います。この活動で多くのことを学びましたが、何よりも協力することの大切さを改めて実感することができました。（2年生・女子学生）

○長期間にわたり活動する今回のような企画は初めての体験だったので、最初のころは何をしていいかわからず、先輩方や先生方の指示に従うだけだった。しかし、何回かやる内に自分がすべきことがわかるようになり、参加者である子どもたちとも楽しく接することができた。特に印象的だったのは、12月24日のウイークエンドスクールで小物づくりをしたことだ。自分たちが企画し事前準備にもかなりの時間を費やし、当日の運営も全て自分たちだけでできたことは大きな自信にもなった。自分たちが企画した内容で、子どもたちが生き生きと活動し、楽しそうにしている姿を見ることのうれしさがよくわかった。今後また、ウイークエンドスクールがあれば是非参加し、新たな企画も考えたいし、今回の反省を活かしたよりよい活動にしていきたいと思う。（1年生・男子学生）

④ 来年度の実施に向けて

今年度からの実施となり、全体の企画運営については、いろいろな面からの課題があげられた。

参加を募集する子どもについては、今年度、小学5年生から中学3年生までを対象とした。27回の開催教室に対して、のべ参加人数は240名であった。（数名の参加者による継続的な参加がほとんどであった。）参加者のほとんどが、小学生であったため来年度の参加募集については、対象の子どもをどの範囲にするのか検討が必要である。また、参加した子どもの多くが大学近辺の子ども達であった。距離が遠くなれば当然、保護者の送迎による参加が多くなる。多くの子ども達の参加を望むためには、開始時間や出前教室など開催場所の検討なども必要であろう。

開催時期と回数については、今年度は実施が遅れたために11月からの開催となった。来年度からは、年度当初からの計画的な運営を行う必要がある。また、この「ウイークエンドスクール in 島大」の取り組みを通して、学生が地域の子もたちに組織的、継続的に関わりながら、企画・実践・評価・改善の一連の教育活動を体験することで、どのように実践力が高まっていったのかという学生の育ちを検証していかなければならないと考えている。

「ウイークエンドスクール in 島大」開催教室（活動場所・時間・参加人数）

| | 11月12日 | 11月26日 | 12月10日 | 12月24日 | 1月14日 | 1月28日 | 2月11日 | 3月25日 |
|---------|---------------|---------------|---------------|-------------|---------------|----------------|---------------|---------------|
| 健康スポーツ | 島大フレンドパーク | 島大フレンドパーク | 島大フレンドパーク | | 島大フレンドパーク | 島大フレンドパーク | 島大フレンドパーク | 島大フレンドパーク |
| | 第一体育館 | 第一体育館 | 第一体育館 | | 第一体育館 | 第一体育館 | 第一体育館 | 第一体育館 |
| | 9:00～12:00 | 9:00～12:00 | 9:00～12:00 | | 9:00～12:00 | 9:00～12:00 | 9:00～12:00 | 9:00～12:00 |
| | 19名 | 13名 | 11名 | | 12名 | 10名 | 4名 | 10名 |
| | 7・4/3・5/0/0/0 | 5・1/5・2/0/0/0 | 1・4/3・3/0/0/0 | | 4・4/3・1/0/0/0 | 6・2/0・2/0/0/0 | 0・1/2・1/0/0/0 | 4・3/2・1/0/0/0 |
| 国語 | | 物語・小説に親しもう | | 物語・小説に親しもう | | 物語・小説に親しもう | | |
| | | 401演習室 | | 401演習室 | | 401演習室 | | |
| | | 10:00～11:00 | | 10:00～11:00 | | 10:00～11:00 | | |
| | | 3名 | | 4名 | | 6名 | | |
| | | 2・1/0/0/0/0 | | 1・2/1/0/0/0 | | 3・3/0/0/0/0 | | |
| 英語 | 英語で遊ぼう | 英語で遊ぼう | 英語で遊ぼう | | 英語で遊ぼう | | | 英語で遊ぼう |
| | 36番教室 | 36番教室 | 36番教室 | | 36番教室 | | | 36番教室 |
| | 10:00～11:30 | 10:00～11:30 | 10:00～11:30 | | 10:00～11:30 | | | 10:00～11:30 |
| | 6名 | 5名 | 4名 | | 5名 | | | 4名 |
| | 3・2/0/0/1/0 | 3・1/1/0/0/0 | 1/2/0/1/0 | | 2・1/1/0/1/0 | | | 1・1/1/0/1/0 |
| 音楽 | からだで音楽! | | からだで音楽! | | | からだで音楽! | | |
| | 245室 | | 245室 | | | 245室 | | |
| | 10:00～12:00 | | 10:00～12:00 | | | 10:00～12:00 | | |
| | 1名 | | 2名 | | | 4名 | | |
| | 0/0/0/0/1 | | 1/0/0/0/1 | | | 2・1/0/0/0/1 | | |
| 自然環境 | | 手作りモーター | | | 自然観察 | | | |
| | | 25番教室 | | | 26番教室 | | | |
| | | 10:00～12:00 | | | 10:00～12:00 | | | |
| | | 11名 | | | 14名 | | | |
| | | 2・6/2/0/1/0 | | | 4・5/3/1/0/1 | | | |
| 美術1 | | | テラコッタ | テラコッタ | | | | |
| | | | 6F 彫塑室 | 6F 彫塑室 | | | | |
| | | | 10:00～15:00 | 10:00～12:00 | | | | |
| | | | 13名 | 14名 | | | | |
| | | 6・3/2・2/0/0/0 | 6・3/2・3/1/0/0 | | | | | |
| 美術2 | | | 七宝焼き | 七宝焼き | | | | |
| | | | 25番教室 | 25番教室 | | | | |
| | | | 10:00～15:00 | 10:00～15:00 | | | | |
| | | | 12名 | 12名 | | | | |
| | | 6・2/1・3/0/0/0 | 6・2/1・3/0/0/0 | | | | | |
| 支援センター1 | | | | 小物づくり | | | オリエンテーリング | 友達の輪をつくろう |
| | | | | 36番教室 | | | 教育学部棟 | 大学会館 |
| | | | | 9:00～12:00 | | | 10:00～12:00 | 10:00～12:00 |
| | | | | 12名 | | | 18名 | 11名 |
| | | | 7・3/1/0/0/1 | | | 12・2/1・3/0/0/0 | 4・1/2・2/1/0/1 | |
| 合計 | 26 | 32 | 42 | 42 | 31 | 20 | 22 | 25 |

※表の見方について

| | |
|---------------|---------------------------------------|
| 11月12日 | |
| 島大フレンドパーク | ～①活動名 |
| 第一体育館 | ～②会場 |
| 9:00～12:00 | ～③時間 |
| 18名 | ～④参加合計人数 |
| 7・4/2・5/0/0/0 | ～⑤学年・男女別人数 (小5/小6/中1/中2/中3=赤:女子・黒:男子) |

| |
|----------------|
| 延べ参加人数 240人 |
|----------------|

(3) 基礎体験交流会

今年度も下記のねらいや日程等のもと、センター主催で基礎体験交流会を実施した。

○ ねらい

- ・年間の基礎体験で取り組んだ活動を振り返り、自己内省を促す。
- ・他の学生の体験を聞き合い、自分が参加した体験以外の情報の共有化を図るとともに、他学生の振り返りや講義を刺激として今後の体験活動への意欲化を図る。

○ 期日及び日程 平成18年2月20日(月)

| | |
|----------------|-------------|
| 12時45分から14時30分 | 特別講義 |
| 14時45分から15時45分 | パネルディスカッション |
| 16時から16時20分 | アンケート及び連絡 |
| 16時30分から17時20分 | グループでの情報交換 |

○ 参加対象

教育学部1, 2年生

○ 会場 特別講義及びパネルディスカッション (38番教室)

グループでの情報交換 (周辺教室)

1) 交流会の実際

① 特別講義

「教師を目指す学生に期待すること」

貝ノ瀬滋氏 (東京都三鷹市教育長)

東京都三鷹市立第四小学校長時代の取り組みを記録したNHK番組のビデオを使って、「自分で創る学力」とはどうあるべきかを具体例を使って、今、学校現場では、「コーディネート力」や「マネジメント力」を持つ教師が求められているということを学生に講義していただいた。

学生にとって、講義の中で具体的な例を示していただいたことで、より興味関心を持って講義を聴くことができたようである。

特に交流会終了後の感想の中で、「とても参考になった」「やはり教師になりたい」という意欲がいつそう高まった」などと書いている学生が多く見られた。

学生の感想1 (特別講義)

交流会において、まず貝ノ瀬先生の特別講義と聞いて、教師に限らずに失敗に負けないということが大切という印象に残りました。一度の失敗でくじけてしまっているのは、これから先の事は見えませんが、二度目の失敗はそこから立ち直る力を養っていくことが必要であると感じました。あと、教師は生徒に希望と夢をやるという一言がありました。自分は教師になりたいという希望を胸に秘めて、大々の生徒に接していきたいと思っています。

学生の感想2 (特別講義)

今日の貝ノ瀬先生のお話は、すごく実践的なお話が多くて勉強になりました。先生と子ども(信頼関係の話を)の時に根拠のある言葉があたりはびきって、子供(子どもの心には響かぬ)といわれ、そのために、普段の観察力が大切だとおっしゃいました。今までの体験活動の中で一番長期間の活動だったのは、中学校のコーラス部の伴奏と指導だったんですが、その活動がまさに貝ノ瀬先生の言葉にあてはまっています。と思います。交流会でも先輩の話をまけて良かったです。

② パネルディスカッション

様々な分野で2年間基礎体験活動を積み重ねてきた学生5人のパネリストが

- ①これまで活動で何を学んだか
- ②活動で困ったこと（困っていること）は何か
- ③今後の課題は何か

のテーマで、ディスカッションを行った。

①のテーマでは、「子どもとのかかわり」という観点で、「養護学校の子どもへの接し方は1人ひとり異なっているので、正しい方法というものはないが、1人でも多くの子どもへの接することはやはり経験として価値があると思う。」「学習支援という立場で、子どもたちとの付き合い方やどのようにしたらよく分かってくれるかを学んだ」という発表があった。

さらに、自分たちで企画するという観点では、三瓶青少年交流の家での事業の中で、「参加者の年齢に合わせて準備するうちに、いろいろと心配りができるようにってきた気がする」という発表も聞かれた。

②のテーマでは、子どもとのかかわりの点で、「子どもがパニックになった時私が戸惑い、どうしたらよいか分からないときがある。」

剣道教室で子どもたちに教えながら、「体力差や習得のスピードの違いをどうするのか。楽しさと厳しさをどう両立していくのか。」、学習支援の中で「小学生の集中力をどう持続させるのか」、自分たちで企画した事業実施の際に「想定外の出来事が起こったときの対処方法や詰めの甘さを感じた。」という発表があった。

学生の感想3（パネルディスカッション）

次に、パネルディスカッションでは友達の前に出て、立派に話をしていて。あの大人教の前で話すことなんて滅多にないのでとても緊張したと思う。内容は、私も共感するところがあった。一方、自分の気付かないところも聞いたので、とても為になった。

学生の感想4（パネルディスカッション）

パネルディスカッションでは、継続している活動について話されており、継続して活動に取り組む良さを知ることができた。私も負けず、職員との交流を深まり、職員と仲良くなる、色々な知識や話を聞いて更に勉強できる良さを知ることができた。やはり、活動を継続して行くと、子どもの成長も見れるということが、一番の楽しみになると思った。私もワークエピソードの音楽講座で、何も知識のないまま、企画・運営をしたことが、パネラーの先輩方が言っていた通り、子どもと触れ合う活動以上に様々な面から勉強になると思った。人から言われて動くだけでなく、大変だけれども勉強になる

写真1（パネルディスカッション）



写真2（パネルディスカッション）



今回のようなパネルディスカッションは初めてであったが、パネラーの5人も自分の意見を堂々と述べたり、フロアの学生も真剣に耳を傾けたりしていた。ただ、時間の関係で、フロアからの質問等を取り上げることが出来なかったのは残念であった。

③ グループでの情報交換会

1・2年生混合のグループを5つ組み、さらに6つの小グループに分け、事前に決めておいた2年生が司会をし、以下の流れで進行した。

- ①簡単な自己紹介
- ②これまでの体験による学び
- ③体験に参加する上での課題や問題点について
- ④感想・まとめ

写真1 (パネルディスカッション)



参加した学生の感想としては、1・2年生に共通して、「体験活動に参加して、不安に思っていることや困っていることが、みんなと同じだった。」「普段参加したことがない活動の様子を知ることができてよかった。」「自分は活動が足りないので、がんばらねばと感じた」といった内容の感想が多く見られた。このことは話し合いの内容が、学生自身がふだんから感じている率直なものであり、学生の共感や自己啓発となったためと考えられる。

特に1年生は、2年生に対して「やはり2年生は1年間多く体験しているだけあった、話す内容や視点が違う」や「1年間の差でも、体験に基づく発言には重みを感じる。」という内容の感想を書いている学生が多かった。

また、同じ研究室の人しか話さないことが多かったり、基礎体験活動については普段の会話にもほらなかつたりするので、「こういう会はよかった。またやりたいと思った。」など、今回初めて計画された情報交換会自体を好意的に受け止める意見が多かった。

ただ、グループ情報交換会が盛り上がっただけに、最初の設定した時間が短かったことで、中身が不完全燃焼になったところもあり「もう少し時間が欲しかった」という意見や、「もう少し少人数でじっくり話し合いたかった」という意見もあり、来年度の会のあり方を再考する必要があると感じた。

学生の感想5 (情報交換会)

自分が困ったこと思ったことは 先輩方も十分 経験されて
いるのだと思った。こういう話し合いを通じて、解決する
ヒントを貰ったり、ボランディアに対する新たな学び方を
聞くことができてとても勉強になった。
一つのボランディアを 通年で続けることは、じつと
子どもと向き合ったり、自分の中で課題を 持って
活動できることがメリットだと思った。先輩方は
ボランディアを通じていろんなことを 学ばれていて、
その話を聞いて 正しいコメントを 言ってくれた。
また、いろんな ボランディアにも 参加して、いろいろな
体験をして 自分のスキルアップを していきたい。

学生の感想6 (情報交換会)

今日の交流会により先輩や先輩の意見を交換することができて、有意義な時間を
過ごせたと思います。特に困った時の話を聞いて共感できる意見もあ
り、また否定できる意見もありました。今日一日の活動を終えて、僕
が一番心に残っている言葉は「信頼」です。基礎体験活動中에서도
も先輩と信頼関係を築くのに苦戦していた。特に中学生の女の子は
僕たちが企画した17にも 批判的ではなく、話し合いのうな
おけで話かできて喜んでました。将来、中学校教師を目指す自分としては、
もっとボランディアに参加して 経験を 積みたいと思いました。
また、僕は今 小学生を比べないことを 悩んでいます。先輩や友達にも比
べない。教師は9割と 注意を受けているので、難しいです。今回のため
交流会があれば、もっと先輩方と 意見交換ができて、参考にさせて
もらえると思うので、また交流会があればいいと思います。

2) 交流会全体を振り返って

この日は午後からの長時間の活動になったが、一連の活動は、学生にとっては有意義であったようである。

その理由の1つとして、前述したが、基礎体験活動が学生間の中でなかなか話題に上がることも少ないために、「自分が活動している時間は学年に応じたものなのか」とか、「活動中に困っているのは自分だけだろうか」などの不安を感じている学生が多くいることが挙げられる。だから今回のように、基礎体験活動について学生同士で自分自身の思いを聞きあったり、励ましあったりして思いを共有化する場や、自分自身の成長を感じたり自己の課題に気づいたりする場が必要なのだと感じさせられた。

また、基礎体験活動を半強制的にやらされているというイメージを持っていた学生にとっては、自分自身の思い込みであったり誤解をしていたりしたということに気づく機会にもなったようである。つまり、基礎体験活動の正しい理解を図る上でも有効な機会となったようである。

今後、今回のように大人数で交流する場を定期的に設けることが必要になるであろうし、教員自身が個々の学生の声に耳を傾けたり、アドバイスをしたりする場を設けることをしていくことが、学生を育てることにつながり、ひいては基礎体験活動自体の意義を高めていくだろうと強く感じた。

学生感想 8 (交流会全体)

今まで、ボランテアについての情報を、友達と話を聞いたことがなかったので、今回の情報はとても参考になった。困っていることや、私だけがではなく、みんなにしているのだと思うことで少し安心した。今日の交流会では、他の人の意見を聞くことができて、それはもちろん良かったが、自分自身がやってきた活動について振り返ることができて、良かったと思う。その上、改めて振り返って、今度は自分が、それぞれの体験などの上から感じたことを再認識できて、新たな発見もあった。それらのことを踏まえて、それからの参考にしていきたい。

学生の感想 3 (パネルディスカッション)

他の人が行った1000時間体験での苦労話を聞いて、こういうところも気を付けなければならないとかがわかってよかった。特に、スポーツ関係とか、学習支援で子どもに関わったことがないので、とても参考になった。1回生に行なった交流会では、養成型のものが多かったけれど、今回は、子どもに関わる活動が多かったことで、活動の幅が広がってきたのだなと思った。

学生の感想 9 (交流会全体)

今日の交流会は今までと全く違っていいけれど、とても有意義だったと思います。1回生にとっては、先輩の意見が聞けて、その後の1000時間体験に少しでも生かせる場だったと思うし、私たちが先輩がやってきたの、いいねと思うことや、私自身、司会をして、2回生は中身がある活動をしてほしいと思っているんだなあと感じました。それぞれにみんなそれぞれの意見を言い合ったり子どもをどうやって怒るかについては活発に話し合いができました。そういう時、やはり1回生は話し合うというの、聞くというだけになっていて、積極的に指名などして意見が出やすいようにしたのですが、やはり不十分だったかなと思います。もっとみんなが言いやすいことを言えたらいいなあと思います。

2. 学外における体験活動

基礎体験領域に関わる体験活動は、その大部分が学外での体験となる。主な学生の体験先は、前述の表2のとおりである。また、体験先で実際に体験した活動は、次の表1のとおりである。活動は、イベント的なもの、長期休業中の事業のようなもの、継続的なもの、登録ボランティアとして年間関わるもの等がある。基礎体験に関わる体験活動において、平成17年度の月別の延べの活動数は、以下のとおりである。

表1：月別体験活動数

| 月 | 活動数 | 月 | 活動数 |
|---|-----|----|-----|
| 4 | 18 | 10 | 17 |
| 5 | 34 | 11 | 16 |
| 6 | 46 | 12 | 13 |
| 7 | 35 | 1 | 16 |
| 8 | 12 | 2 | 9 |
| 9 | 30 | 3 | 6 |
| | | 合計 | 252 |

月によってばらつきがあるのは、先に述べたように特に継続的な活動は、年度の初めに学生の受付を行うため5～7月と、学校では2学期、大学では後期の9月に多くなっている。

〈主な継続的な活動〉

- ・学童保育（障害児を含む）
- ・子どもの居場所づくり事業
- ・少年スポーツクラブ
- ・適応指導教室
- ・学校支援
- ・サタデースクール

(1) 学生への指導

これらの活動は、実施主体、実施時期及び期間、内容等様々である。年度を過ごす中で基礎体験の指導のための時間は時間割に位置づけられていないため、指導時間の確保が厳しい状況であったが、学年全員が履修する実践研究や教職共通科目の授業等の前後の短時間を利用して、学生には指導を行った。その際に主に配慮したポイントは次のとおりである。

- (1) きっかけは、時間の積み上げのためでもよい
- (2) 子どもへの関心、教育活動への関心や関わりに対する意欲が土台となる
- (3) やってみて気づき、身にしみるのが体験である
- (4) わからなくて当たり前、学ぼうとする態度が大事である
- (5) 信用を失う行為は慎むこと
- (6) 試食して回るような体験の積み上げは、得るものが少ない。核となる活動をもて
- (7) 教員をめざす上で基礎体験は、必ず生きて働く力となる

同じような内容を繰り返し伝えることで個々の意識の変革へとつながることを期待した。学生の体験の振り返りや様子については、後述する具体的な取り組みの報告の中で紹介することとし、総括的な評価は別の機会に報告と分析を行うこととする。

また、個別の学生への指導については、一つは、体験先数カ所へセンター教員が訪問して様子を伺ったり、指導を行った。今一つは学生が体験後に提出する「基礎体験活動記録票」に時間の認定に併せて学生の所感に対してコメントを記入して返すようにした。

(2) 学外事業の特筆する取り組み

学外での様々な活動は、先に述べたように多種多様である。受け入れ先の学生指導の体制も多様である。教員OBの塾長のもとで子どもの週末の学習チューターを行う活動のようなものもあれば、保護者や数人のボランティアで行う学童保育のような活動もある。学生を受け入れる団体の目的は、学生指導のほかにあるところが多い中、今後、センターと受け入れ

団体がいかに連携して学生に関わっていくかが課題となっている。

ここで特筆すべきは、平成17年度から国立三瓶青年の家と共同調査研究事業に取り組んだことである。

1) 国立三瓶青年の家との連携

国立三瓶青年の家においては、時代の変革の中で学生を中心とした青年を施設ボランティアとして養成する事業に取り組んでいる。国立三瓶青年の家には、ボランティア養成講座の開設による学びの場の提供とボランティアによる施設運営への参画がねらいとしてある。一方、センターとしては、学生にとってここでの学びは、単に施設のボランティアとしてのノウハウにとどまらず、人間関係能力をはじめ、企画力、指導力、あるいは子ども理解といった基礎体験でめざす目的にせまる体験が可能となるとの判断がある。そうした双方のメリットが共同事業に発展したのである。

具体的には、双方からなる研究委員会を定期的に開催し、国立三瓶青年の家のもつ実践的体験活動による豊かな体験が基礎体験での期待する学びにどう貢献できるかについて調査研究していこうとするものである。研究委員会は、今年度3回開催した。

獲得する能力と国立三瓶青年の家のボランティア養成講座及び事業のイメージは、資料「国立三瓶青年の家との共同調査研究事業」のとおりである。事業のスタートにあたる入門セミナーには、16年度は85名、17年度は74名の学生が参加している。

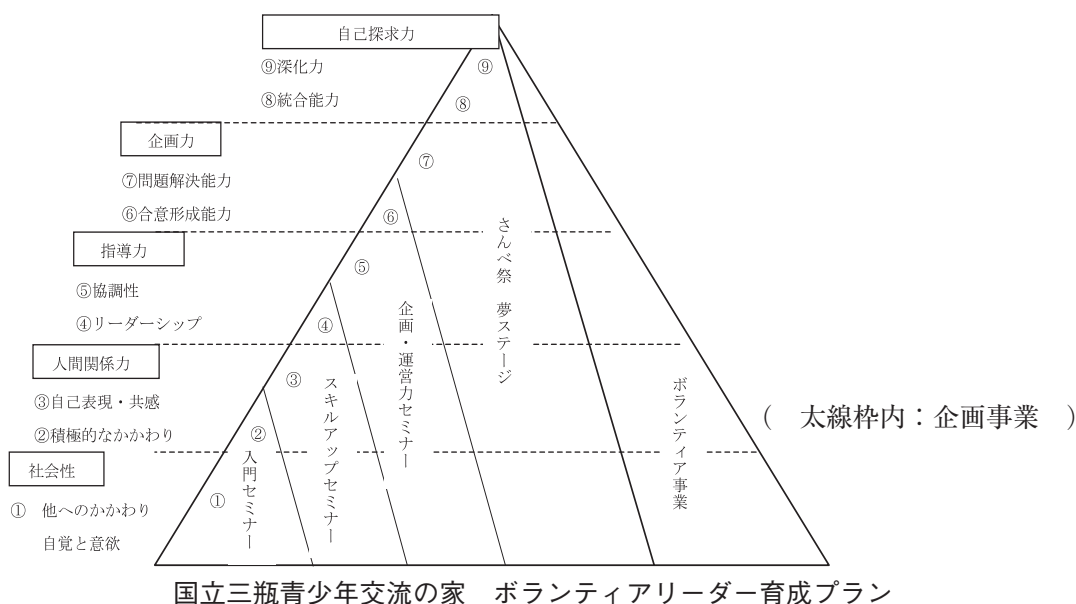
平成20年3月を目標に調査研究を進めることとしている。

(資料：国立三瓶青少年交流の家との共同調査研究事業)

島根大学教育学部・国立三瓶青少年交流の家コラボレートシステム (案)

島根大学教員養成基礎体験領域 (410時間) 指導評価項目との関係

①～⑨；求める資質項目の観点と企画事業のねらい



(3) 受け入れ先からの意見や要望

学生を受け入れた学校、教育委員会、NPOをはじめとする民間団体及び青少年教育施設から寄せられた意見は、以下のとおりである。

【受け入れ先からの感想や意見、要望等】

1) 幼稚園、小学校、中学校

〈評価する内容〉

- ・日頃の活動や授業では、味わえない明るさや元気等、生徒たちはとても親近感をもち、楽しく活動していました。
- ・できれば長く一緒に活動してほしいです。大学の授業や都合上、難しいでしょうが。
- ・社会人としての体験もでき、本校生徒もよい学習ができて喜んでおります。
- ・学生の方については、態度等特に申し上げることはありません。参加生徒がもっと多ければ活発な活動がして頂けたのにと残念です。
- ・本校の卒業生で、部の先輩ということもあり、頼もしい存在でした。実技の面、心の持ち方の面等よく指導していただきました。
- ・体験を通して学ぶことは多く、取り組みの趣旨にはとても賛同できます。今後とも依頼があれば、積極的に受け入れさせて頂きたいと思っています。
- ・来ていただいた学生の方々には、大変熱心に中学生への支援をしてもらっており、感謝している。現在の取り組みを継続していく上で学生の協力が不可欠である。是非多くの学生に事業内容を周知して頂き一層のご協力をお願いしたい。

〈改善すべき点や課題〉

- ・病欠等で決めていた時間（日数）をこなせない学生も見られたので出席簿のような形で時間数を把握した方がよいと感じた。
- ・積極的な行動（連絡等）を望みます。
- ・積極的な働きかけがあれば、よいと思いますが、課題意識をもって体験されるとより有意義な体験になると思います。
- ・大学から出て頂くときの講義とのかねあいとか不安です。情報がHP等にアップされると計画が立てやすいのですが。
- ・生徒と積極的に関わるというよりも、自分たちで話す場合が時々見られ、気になった。やや指示待ちだった。
- ・合宿への参加は、全く初めての出会いではあまり効果がないように思った。それまでに関わり、実態のわかっている学生の方がよいと思う。
- ・障害児学級の子どもの関わりについては、その時間だけの関わりでは、なかなか成果は上がりにくいと感じた。
- ・意欲的ではあったが、参加回数や参加の形の見通しがもてなかったため、効果的に参加してもらうことがなかなかできなかった。授業への参加は年間見通して、計画的に行う必要がある。
- ・幼児の前で話したり、演奏したりしたのは初めての経験だった様子でやむを得ないが、

例えば話し方や間の取り方など工夫してほしいことが多々あった。

- ・「幼児が誰も静かに聞くことは無理である。」という前提に立つとどれほどの子どもの関心を引きつけられるか、そのためにはどんな工夫が必要かといった演奏以前の心構えのようなのが必要だと思う。
- ・当日、欠席の連絡があり困った。遅刻や持ち物を忘れてくる学生がおられたので自覚を持って欲しい。
- ・事前に一齐に集めて指導、学期単位での振り返り等が必要だった。

2) 教育委員会、福祉部局（学童保育）などの公的機関

〈評価する内容〉

- ・教育支援センターでは不登校の児童生徒が学んでいるが、子どもとも年齢が近く、子どもたちのよき理解者となり、子どもたちの人間関係を広げることにつながっている。あまり構えず、自然に入って来られるのもよい。
- ・非常に助かっており、好感を持っている。
- ・活動前に子どもの接し方などお願いしたことは、きちんと守ってくださるので、指導員も子どもの指導がやりやすい。
- ・教科の学習もみていただくが、教え方も上手である。
- ・本当に熱心に活動していただき喜んでいる。今後も是非継続していただきたい。
- ・子どもとの関わりで、教員をめざす学生たちの良き学習の場となっていることは大変評価できる事業である。また、参加した学生同士の交流の場ともなっている。今後とも双方のメリットを考えて活用していきたい。
- ・授業の中では想像できない現実があり、戸惑いを覚えながらも懸命に取り組む姿が見受けられました。困難な課題にぶつかったときも、相談をしながら乗り切る姿がありました。現場を体験して自分自身で感じてほしいと思います。
- ・授業以外の体験ができるこの1,000時間体験、非常によい取り組みであると思います。できれば、学生へ直接紹介ができる場を設けていただきたいです。
- ・通うことが大変で学生には大変無理をお願いしている点、感謝しております。保護者からも継続を望む声があるので是非とも来年もお願いしたい。

〈改善すべき点や課題〉

- ・財政事情が厳しく、交通費も支給できなくなりそうである。
- ・学生なので仕方ないことだが、来て頂ける時期が限定されてしまうので、年間を通してきていただけるようになるとよいと思う。
- ・本年度は、16名の学生が登録してくれました。都合がつかなくて1日も参加できなかった学生が約半数でした。できれば、1日だけでも参加していただければありがたいと思います。
- ・学生からもこちらの評価があるとよい。
- ・10名余りの学生が支援員として登録したが、事業開催日が平日、不定期ということで連絡は取り合ったが日程調整が難しかった。学生への期待は大きく、今後参加しやすい環境について検討していきたい。
- ・言われてやるのではなく、事前に自分で考え行動をとるように心がけて参加してほしいと

思います。

- ・学生の遅刻が何回かあり、事業自体には特別支障はなかったが、やはり時間厳守は守ってほしいと思います。
- ・それぞれ明るく積極的に取り組んでいる様子が見られ、大変楽しく活動することができたが、一参加者に過ぎないような態度が散見され、学びの一環であるという自覚があればもっと良かったと思う。
- ・児童・生徒理解、児童・生徒への接し方を具体的に実技指導しながら、繰り返し積み上げていくことが必要であると感じた。
- ・連絡をせずに無断で欠席する学生が数名おり、大変困った。当初の約束が守られずに大変残念であった。また、服装の件についても何度か指導した。子どもに接する上でふさわしい服装をお願いしたい。
- ・1回だけの参加よりも複数回継続して参加することが、学生の資質向上に有効と思います。本団体としても継続参加して頂ける学生が望ましいので、そうした学生が増えるよう支援していただきたい。

3) NPO、学童クラブ等の民間団体

〈評価する内容〉

- ・親でない、大人でもない、学生さんの存在は、子どもたちにとって貴重な存在です。意識の高い学生さんが増えることを望みます。(青少年教育NPO)
- ・これから指導者になる方が、この活動をされることをとても喜んでいて。子ども中心の活動の多い当館にとって、互いに学ぶことが多いと思います。何事も体験と思って気軽に参加してもらえたら嬉しいです。
- ・本当に島大の学生さんには感謝してもきれないほどです。みなさんのおかげで子どもたちの放課後、長期休暇は有意義なものになっています。
- ・年を重ねるごとに多くの学生さんが成長されていますので、このまま頑張ってくれていれば言うことなしです。
- ・大変熱心に取り組んで頂いて喜んでいて。
- ・活動自体は、大変はきはきとした態度で子どもたちと過ごして下さった。
- ・大変よいかリキラムだと思います。学生のうちに社会の人に触れ学ぶ機会は学生にとって、教育者としてだけでなく、一人の社会人として貴重な経験につながると思います。
- ・学生の参加は、スタッフだけでなく、子どもたちや保護者にとっても新鮮で反応がよく、皆が喜んでいて。趣旨や研修内容、子どもとの関わりなど素直に受け止めていました。自分自身の成長のために参加したと思っているからこそ、1年間を通して通えたのではないかと思います。
- ・クラブスタッフよりも多くの時間を割いてくれ、大変助かって降ります。
- ・地理的に条件が悪い中、何度も来て頂き本当に喜びました。他の学生さんも松江市から外に出て、島根にもいろいろな気候、風土があることを実感していただきたいと思います。・子ども達は楽しく学生さんと練習しています。自分達でできることは、自分達でしなさい、とよく言っておられます。技術面ではなく、礼儀や精神的なことも教えてくださるので大

変うれしく思います。子ども達が体育館に来るのが楽しみになるような指導者になって欲しいと思います。

- ・活動時間が平日の夕方が多い上、交通の便が良くなかったせいか、来てくださる回数も少なかったのが、大変残念だった。休日の活動時間には、熱心に子ども達に指導して下さり、親しみやすく信頼関係も徐々に深まっていったように思います。今後も継続して指導して下さることを希望しています。
- ・自分もこの間まで学生で、今もまだ未熟ですが、学生の頃に少しでも社会に出て色々なことを体験することは後の人生において役立つと思います。たくさんの方々と接して、よいことはいっぱい吸収してほしいです。積極的にがんばってください。

〈改善すべき点や課題〉

- ・活動に参加したときに、名札（大きいサイズでふりがな付きの氏名を記入）をつけて来てくださるといいと思います。
- ・参加後の感想も学生さんから伺いたいですので、様式を作成し終了後自主的に提出していただきたいと思います。（現在、こちらの様式で書いて下さいとお願いして記入してもらっています。）
- ・イベントの手伝いなどもお願いしたかった。メール等での急な対応も受け入れて下さると助かります。
- ・子どもと直接触れ合う活動では、キャンプ当日だけではなく、事前と事後も大切な活動であるということ認識してほしいと思います。
- ・精一杯取り組まれた学生さんもうらっしゃいましたが、他のバイト等、どちらが優先されるのか……。学生さんもお忙しいのでしょうか。
- ・1,000時間体験は貴重な体験とは思いますが、やはり基本は本人の気持ちだと思います。学生さんにとっては、1,000時間の体験かもしれませんが、子どもにとっては、その時間が貴重な時間です。そこらへんのことを十分理解いただいた上で参加していただきたいと思います。
- ・一部、常識的な部分が欠けている行動をされた学生さんには注意をさせていただきました。活動ごとに学生代表などがあれば連絡が通りやすくなるのでは？と思うことがあります。
- ・学生に対して、感想等の書き方を指導してやってください。本人が持ってこない場合があるので、そのあたりの社会的なルールもセンターの方で指導しておくべきこともあるのではないのでしょうか。
- ・センターの関わり方が薄いように感じます。学生は「時間さえもらえれば……」というような意識の学生が増えていくと思います。学生に対して何を求めていくのかを意志確認することが必要です。
- ・複数でしか参加しないという学生は、基本的に断るようになりました。どうしても遊びの感覚でその時間を過ごしてしまいます。地域に入り込む機会をうまく使えるように指導してほしい。
- ・イベントスタッフとして3日間よく頑張ってくれたが、体力的にかなりきつそうだった。普段の体力づくりが必要である。

- ・スポーツ活動なのでもっと積極的に子どもたちと触れ合っていたきたい。特に技術力を子どもに見せることによって子どもの目が変わるので、積極的にパフォーマンスをしていただきたい。
- ・年間を通して関わった学生もいれば、初回しか参加しなかった学生もいたりと思欲によって個人差が大きかった。
- ・報告すべきことを直接話すことを避け、メールですませる。研修に参加する際の服装の乱れ（ズボンを腰までずらしてはくなど、TPOに合わせられない）。年配者に対する言葉遣いや関わり方など、学生本人のためと思い、一年間指導してきました。
- ・自ら進んで参加する意欲が、やや薄いように感じました。「待っている」という態度にそれを感じたのですが、それがどこから出てくるのか、1,000時間の意味が理解されているのかどうか。今の時代の子育ての結果なのか……は不明。
- ・その活動に参加しようと決めた本人の意志がはっきりしないと受ける側も期待はずれだったり、参加する本人も満足のいかないものになるかもしれない。ボランティアであっても「お手伝い」ではなく「○○を知りたい、学びたい」という目的意識が欲しいです。

4) 青少年教育施設（国立、県立）

〈評価する内容〉

- ・不登校児童・生徒を理解し、積極的に取り組む中で学習することも多かったのではないかなと思う。（不登校児のための野外活動支援）
- ・学生が主体となり、企画から実施までの全てに関わる事業ということもあり、積極的に一人ひとりが責任感を持って活動に取り組んでもらった。（ボランティア企画事業）
- ・30名を超える集団となったが、主体的に活動に取り組み、企画力等もついてきている。（ボランティアミーティング）
- ・今年度の学生は、非常に積極的な関わりの姿勢を見せてくれた。（野外活動講座）
- ・本事業の参加者は、意識が高くとても熱心であった。事業後もやってきては事業で身につけたリーダーシップを遺憾なく発揮している。（リーダー養成講座）
- ・学生企画の活動であったので、試行錯誤しながら準備等を行い、当日も壊れた所を補修するなど意欲的な姿が見られた。（施設フェスティバル）
- ・1, 2年生にはグループリーダー、2, 3年生には自主企画という形態をとったことで学生も充実感をもった。教員をめざす上でまた3年生での教育実習にのぞむ上でも有効に働きかけられたのではないかなと思われる。（週末子ども事業支援）

〈改善すべき点や課題〉

- ・参加者個人の持ち物、事業のねらいなどが正確に伝わっていない、というより学生が細部まで意識していない。取りあえず行けばいいかな？という感覚が見受けられた。（ボランティア入門セミナー）
- ・平日の事業にも参加できるような手だてを考えて欲しい。（心に悩みを持つ子どもの野外活動支援）
- ・たくさんの参加者が得られるように広報をお願いしたい。（ボランティア入門セミナー）
- ・活動中の携帯の操作や友人同士の会話等スタッフの一員として自覚を促す指導が必要であ

ると感じた。(週末親子事業支援)

- ・友達と参加するのはよいが、他の参加者とも積極的に交流をもつような雰囲気を持って欲しい。(青年対象事業)
- ・教員をめざすという志をもって、活動していただければと思います。本所での子ども(保護者)、自然との触れ合い・体験が学生たちに有益なものになると確信しています。
- ・学生たちの声が聞きたいです。体験が学びへとつながっていくプロセスが知りたいです。そういった情報を提供していただくとありがたいです。

5) いずれの団体からも出た課題

- ・学生との連絡がなかなか取れなくて困った。(連絡先が不明確)

(4) 受け入れ先の意見から見える課題

受け入れ先から寄せられた意見を成果と課題としてまとめると次のとおりである。

〈成果〉

- 1) 体験は、学内の学びでは得られない能力獲得の機会となっている。
- 2) 学生の受け入れは、団体の活動の活性化に貢献している。
- 3) 教員をめざす学生には、学校外の子ども理解の場となっている。
- 4) 社会人としての学びの場にもなっている。

〈課題〉

- 1) 基礎体験の意義の理解し、課題意識をもって体験参加させる必要がある。
- 2) 社会人としてのモラルの向上(礼儀作法、遅刻や欠席の連絡、服装など)を図る必要がある。
- 3) 事前指導、事後の振り返りの場の必要がある。
- 4) 学生、受け入れ先、センター相互の情報の交換(成果や課題等)をする機会をつくる必要がある。
- 5) 学生にとって継続して取り組むような核となる体験(先)をもつことが大切である。
- 6) 学生への確実な連絡手段について再検討する必要がある。

なお、具体的な今年度の基礎体験領域の成果と課題については、後述することとする。

IV 平成17年度の成果と今後の課題

1. 成果

「1,000時間体験学修」を新カリキュラムとして採用して2年経ったが、下記の点などで1年目に比べ、より成果が上がってきている。

(1) 活動場所・活動数の拡大

前述したように、17年度は132事業所からの募集があり、昨年度に比べて65事業所増えている。また、同じ事業所でも何度も応募してくるところも多くあった。これらのことは、いかに学校現場や社会教育施設等で人手を欲していることの表れであり、支援者としての学生のニーズが高まっていることを示していることに大きく関係している。それに、ちょうど島根大学の基礎体験活動があてはまってきたこと、そして2年目になり認知度が上がってきたことで、活動数や活動場所の増大につながってきていると考えられる。山陰両県の市町村教育委員会と教育学部との連携が進んだことや基礎体験活動に関わる学生が3学年になることで、いっそう増えていくと思われる。

(2) 事業所における学生の役割の認知

事業所によっては、例えば学童保育等の活動においては学生の働きを十分認め、学生がいなくては活動が上手く回らないというようなところもある。さらに、社会教育施設などでも各種行事で学生が立てた企画がメインになるなど、役割は大きくなってきている。事業所によっては、学生を育てていこうという構えで取り組んでくださる事業所も増えてきた。

(3) センター主催事業の拡大

これまで述べてきたように、昨年度からあった入門期セミナーⅠおよび基礎体験交流会の内容をさらに進化発展させて実施したり、新しく「ウィークエンドスクール in 島大」を始めたりした。

(4) 支援センターHPや掲示板の改善

学生に、より内容が分かりやすく、申し込みしやすい広報のあり方を考えてきた。特に学生がよく目にする掲示板は、活動名の一覧を作ったり活動の内容で分類したりするなど工夫をしてきた。



2. 課題

一方、2年目になり、今後この活動をさらに充実させていくための課題が明らかになってきた。

(1) 実際の活動の状況の把握

学生が実際に活動している様子をあまり見ていなかったり、活動の様子を聞いたりすることがあまりなかったので、事業者から『こういう状況で困る』という連絡が入って、初めて学生の活動の実際を知ることがあった。

そこで、活動中に活動場所を訪問したり、活動に事後指導の場を設け学生から話を聞いたりしていきたい。また、活動後に事業者の方に学生の様子を聞いていくなど連携をもっととる必要がある。

(2) 学生が自分の体験活動の振り返り

活動に当たって、自分自身の課題がはっきりしておらず漠然と活動に参加したり、2年生になっても、1年生のときと同じように、活動の感想の欄に「友達が出来てよかった。」と書いたりする学生もいる。

そこで、事後指導の場を設け活動の振り返りをしながら、身に付いたことや今後の課題などを意識させたい。また、基礎体験活動で身に付けてほしい力を学生にも示し、事後指導の際の参考資料としたい。

(3) 講座との連携

各主専攻の教員は、自分のところの学生がいったいどんな活動をしてきているのかわからないので、サポートも出来にくい。また、学生自身も一体どれだけ活動しているのか把握していない。学生が認識する活動時間と実際の認定時間とズレもある。

そこで、将来的には web 上での認定等で、学生も教員も活動の歩みや認定時間を閲覧できるようにしたい。また、事後指導の中で、活動時間を認定して知らせることで、学生にはその都度伝えていきたい。

(4) 事業者との連携

基礎体験活動の意図を理解してもらっていない、単なる作業や大会の役員依頼などの募集もあった。これはこちら側の広報が足りないということもあった。

そこで、これからは事業者との連絡協議会を定期的に関き、大学としての意図を伝えたり学生の様子をうかがったりするという、場を設けていきたい。

また、事業者の方が募集をかけてきた時に、学生募集用紙で活動の内容を確認したり、基礎体験活動の意義を伝え理解してもらったりしていきたい。

(5) 1,000時間体験学修についての理解

学生の中には、1,000時間全て基礎体験活動をしなければならないなどという誤解をしていて、余計な負担感や不満を感じている学生もいる。そこで、この誤解を解くために、学生に対して、いろいろな場を通して何度も正しいアナウンスをしていく必要がある。また、学部教員の中にも正しく理解していない教員もいるので、学生に対してと同じように、正しい知識のアナウンスと啓発をしていかねばならない。

以上は、いずれも今後の基礎体験活動のあり方にとっては、大切な課題ばかりである。平成18年度はこれらの解決をしながら、進化発展していかなければならないと考えている。

V おわりに

平成17年度は、対象学生が1・2年次とほぼ倍増したため、学外の活動受け入れの開拓に多大の労力を必要とすると当初は想定していたが、地域の活動受け入れのニーズは我々の予想を大きく越えており、学生の活動の場の確保という点では、問題はあまり生じなかった。しかしながら、平成16年度と同様に、地域の活動受け入れの期待する期日や時間帯と、学生が地域に出かけることが可能な期日・時間帯との、ずれがかなりあり、応募者が無い活動もかなり生じている。学生の大学でのカリキュラム履修スケジュールの実態にあわせて、地域での活動計画を調整して頂くなど、活動受け入れ団体（活動受け入れ事業者）との事前の連絡調整が不可欠であることから、平成18年度当初に受け入れ事業者との基礎体験学修連絡会議を開くなど、平成17年度の基礎体験領域の活動の評価から運営上の改善点は数多く浮き彫りになって来ている。

特に、活動に従事する学生の「活動の振り返り」（体験の省察）を確実に行わせるため、附属教育支援センター教員による事前指導や事中・事後指導の態勢の確立と、基礎体験学修記録票による「振り返り」チェックリストの改訂作業等を年度末に取り組み、平成18年度頭初から新しい態勢で臨むことになった。このように、学生の活動についての手厚い指導体制が可能になっていくことの裏付けとして島根県や鳥取県からの現職派遣教員の増強や学部の若手教員を中心とする基礎体験領域専門部会の体制強化がなされたことが大きい。2年次を迎えて、2年次生は各専攻講座に所属し、所属講座ごとに専攻の特性を活かした講座別体験として100～250時間を設定し実施することになった。これにより、初年時の教育支援センター中心の学生指導態勢が、センターと各講座とが連携する態勢へと移行しつつある。その典型が「ウィークエンドスクール in 島大」の活動である。全体的な企画立案、募集、進行管理等は教育支援センター教員とセンター募集に応じた学生スタッフが担当し、各講座から講座の特性に応じた活動メニューが提示され、講座の教員と学生が連携して各メニューの実施にあたる等、基礎体験活動を学部全体で支えていく態勢が整いつつある。それにより、教育支援センター専任教員が学生の体験の省察のための「振り返り」活動をより重点的に指導することを可能としているのである。

また必修的な活動として体系的な「振り返り」をシステム化すべく「入門期セミナー」（1年次）のみでなく、「基礎体験交流会」を恒常化して「基礎体験セミナー」として4年間の体験活動を段階的・発展的に「振り返りつつ、次に活かす」ように改善を図っている。

平成18年度からは、小川新センター長体制の下で、より意欲的・積極的に基礎体験領域の指導態勢見直しと改善の作業が着々と進んでいる。この詳細については平成18年度教育大学協会研究集会（千葉大学大会）にての口頭発表及び本研究紀要にて報告したい。